

5月27日(日) 10:40~11:20 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

東大寺法華堂天平期諸像に関する研究

東北大学 濱田 恒志
HAMADA Koshi

東大寺法華堂には、天平期に制作された14軀の尊像が伝えられており、天平美術を代表する名作として、これまで龐大な研究がなされてきた。しかし一方で、諸像をめぐる信仰の統一的解釈については、諸像の様式が異なるうえに、類例のない尊像構成をとっているため、未だ定説を見ない状況にある。近年長岡龍作氏は、法華堂像を含む古代の梵天、帝釈天、四天王について、礼拝者の持戒・清浄性の観察者、破戒の際の懲罰者としての性格を指摘した。本発表はこれを踏まえ、法華堂諸像のうち特に本尊不空羈索觀音像、本尊像を囲む乾漆造の八軀の梵天・帝釈天・四天王・金剛力士像（乾漆八天像）、そして執金剛神像を取り上げ、金光明寺主要堂宇から東大寺法華堂への変遷を視野に入れつつ、諸像をめぐる信仰についての統一的解釈を試みるものである。

乾漆八天像は、核をなす梵釈四天王の組み合わせに金剛力士が加わった特色を持つが、古代の金剛力士の役割については、これまで深く考察されたことはなかった。本発表で着目したいのは『大般涅槃經』であり、ここで金剛力士は、法会の場において外敵を責め、追い払う性格を持つと説かれる。これを踏まえれば、金剛力士は、梵釈四天王を補完する役割をもっていたと解釈できる。つまり乾漆八天像は、礼拝者の持戒・清浄性を観察すると共に、それを脅かす外敵を追い払うことで、法会に際して法華堂の清浄性を維持していたと考えられる。

これに関連して本尊像について指摘できるのは、『不空羈索神呪心經』に、不空羈索觀音の功德である二十勝利・八法を得るために陀羅尼念誦について、その前提に持戒、清浄性の獲得が必要であると説くことである。また浅井和春氏が重要性を指摘した本尊像の光明表現は、低く設定された光背や華美な宝冠に顕著だが、これらについては、『不空羈索陀羅尼經』の、陀羅尼を誦し終わると光明などの瑞相が示現するという所説との関連性が指摘できる。以上より本発表では、東大寺法華会が、当時の代表的な滅罪經典である『法華經』を、乾漆八天像と不空羈索觀音像の前で講ずることで、清浄性を身につけ、不空羈索觀音の功德を得る法会であったという解釈を提示したい。

本尊背後の執金剛神像は、それまでの日本に類例のない独尊の金剛力士像であり、『日本靈異記』中巻二十一縁で既に独尊像として紹介されることから、従来、独尊像としての造立を疑われたことはなかった。しかし『日本靈異記』中巻二十一縁の内容は『法華經』『普門品』の影響が著しく、本説話は東大寺法華会成立との関連性を軸に再検討される必要がある。本発表では、その検討を踏まえ、執金剛神像が、もとは通例のように仁王像であったものが、法華会催行にあたって、「普門品」所説の独尊の觀音應現身として意味づけられたという経緯を、新たに提示したい。